

障がい者スポーツによる学生の意識変化に関する研究

A Study on the Changes in Students' Awareness by Disabled sports

体育学部健康科学科

小玉京士朗

KODAMA, Keijiro

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

Abstract : In this study, we examined the influence of practicing disabled sports on the perception of disabled sports and people with disability. As a result, we could clarify the following. After implementation, ① There was a decrease in the perception that disabled sports is one of the methods for rehabilitation. ② Because of difficult movements and feeling of fear, there was a significant decrease in negative perception towards people with disability. From the above, it seems that the practice of disabled sports is effective in enhancing awareness on it and at the same time, increasing its attractiveness. Furthermore, practicing sports under similar conditions with disabled people is able to increase the penetration in understanding people with disabilities.

キーワード：障がい者スポーツ，実践学習，障害理解教育

I. 背景

2011年8月に施行された「スポーツ基本法」では、障害者の自主的かつ積極的なスポーツを推進すると基本理念が掲げられた。2012年3月には文部科学大臣より「スポーツ基本計画」が策定され、障害などを問わず、広く人々がスポーツに参画できる環境を整備することが基本的な政策課題であるとされ、現在に至るまで様々な障がい者スポーツに関する取り組みがなされている。

2016年3月文部科学省の中間報告にて障がい者スポーツの普及促進方策の報告後、同年4月1日には「障害者差別解消法」の施行に伴い、現在教育機関のみならず、スポーツ関連施設や公共施設、一般企業等においても各種障害に対しより一層の適切な理解や対応が求められている。

この様に近年、障害者を取り巻く環境が大きく変化しており、国内外に問わず障害者に対する理解・浸透を目的とした活動や取り組みは今まで以上に重要視されている。

教育関連施設における各種障害に対する理解・浸透を目的とした活動では、主に障がい者スポーツの実践教育が実施されており、その学習効果について多くの報告がなされている。

永浜ら（2011, 2012）は、大学生を対象としアダプト・スポーツの実施前後において障害者に対する接し方や障害に対する認識が有意に高くなったと報告している。松尾ら（2013）は、小学生を対象とし車椅子バスケットボールを中心とした車椅子運動プログラムの実施により、実施前では「障害は無い方が良い」、「かわいそうだ」と言った障害や障害者に対する否定的印象であったが、実施後では肯定的印象を持つようになり変化し、障害者と直接交流を持つことが困難な状況にあっても障害疑似体験や障がい者スポーツの実施により障害や障害者に対する理解・認知の浸透に影響することを示唆している。

本学は、障害者に対して円滑に適切なスポーツやレクリエーション活動の協力を行うことができる人材を育成する方法の一つとして、全校生徒が履修対象となる障がい者スポーツ論をはじめ、障がい者スポーツ大会のボランティア活動等の取り組みを実施している。

われわれは、今まで上記の障害者に関わる取り組みが参加学生の認識に与える影響について検討し、障がい者スポーツやボランティア活動を体験、実施することにより、障害者や障がい者スポーツに対する否定的な印象が肯定的な印象に変化する傾向が認められたと報告してきた（小玉（2015, 2016））。この結果は、他の先行研究と同じ傾向を示した（吉岡ら（2007）、内

田ら (2013), 松尾ら (2013))。しかしながら, 今まで本学で検討した調査内容の対象者は医療従事者を指す学生のみであり, 教員や公務員, 一般企業を希望する学生の対象者はいなかった。そこで本研究は, 医療従事職希望学生のみならず教員や公務員, 一般企業職希望学生を含めた対象者に対し障がい者スポーツの実践が, 障がい者スポーツや障害者に対する認識に与える変化について検討することを目的として実施した。

II. 方法

1. 対象およびアンケート調査方法

対象は, 本学において障がい者スポーツ論を受講し, 本研究に同意を得た学生35名 (男性23名, 女性12名, 平均年齢 18.9 ± 0.8 歳) とした。調査項目は, 大山 (2017) の先行研究で用いられたアンケート項目を参考とし独自に追加項目を加えたアンケート用紙を使用した。質問項目は, 全部で19問あり障がい者スポーツの実施前後における比較質問項目は15問とした。その内訳は, 障がい者スポーツに関する質問6問, 障害者に関する質問9問とした。残り4問は, 現段階での当てはまる希望進路先, 現在までの障がい者スポーツの関わりの有無, 希望進路に対して障がい者スポーツが役に立つか否か, 授業の感想とした。

アンケート調査は, 14回目の講義時間に障がい者スポーツ実践前, 後に実施した。

質問内容は, 主に偏見や否定的なイメージについて確認をする項目が多いため, 各種質問に対し「強く思う」, 「すこし思う」, 「どちらともいえない」, 「あまり思わない」, 「全く思わない」の5段階尺度を用い, 選択肢の「強く思う」を「2点」, 「すこし思う」を「1点」, 「どちらともいえない」を「0点」, 「あまり思わない」を「-1点」, 「全く思わない」を「-2点」

として数値化し平均値を求め比較検討した。実施前後における各質問項目の比較は, Excel統計2015を用いStudent-T test (対応あり) を行った。有意水準は5%未満とした。

アンケート調査実施前後に今回の調査の趣旨を口頭および文面にて説明し同意を得て調査を実施し, その場で回収した。アンケート用紙未記入は除外した。

2. 障がい者スポーツの実施方法

本研究で実施した障がい者スポーツ体験は, 視覚障がい者を対象とし実施されるブラインドサッカーの体験内容の一部とした。使用した用具は, 特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会にて運営をしているストアから購入したブラインドサッカーボールと市販されているアイマスクとした。実施内容および実施手順は, はじめに視覚を閉じることで生じる危険性および注意事項を口頭にて指示した後, 1. 先頭者の誘導によるアイマスク着用下での集団歩行体験, 2. アイマスク着用下での周囲のアドバイスをもとに実施する個別歩行体験, 3. アイマスク着用下での周囲のアドバイスをもとに実施する個人ドリブル体験とした。実施時間は, アンケート調査を含め90分とした (図1)。

III. 結果

1. 対象者の属性について

アンケート回答率は, 35名中29名 (82.9%) であった。有効回答者の所属学科の内訳はこども発達学科2名, 体育学科17名, 健康科学科10名であった (表1)。

障がい者スポーツとの関わりを持った時期は, 小学生時1名 (6.7%), 中学生時3名 (20%), 高校生時2名 (13.3%), 大学生時9名 (60%) であった (表2)。将来希望する職種については, 医療・介護従事11名



1. 先頭者の誘導によるアイマスク着用下での集団歩行体験

2. アイマスク着用下での周囲のアドバイスをもとに実施する個別歩行体験

3. アイマスク着用下での周囲のアドバイスをもとに実施する個人ドリブル体験

図1. 障がい者スポーツの実施方法

(38%), 教員 8 名 (28%), 公務員 3 名 (10%), 一般企業 5 名 (17%), 保育士 1 名 (3.5%), その他 1 名 (3.5%) であった (図 2)。

表 1. 有効回答者の属性

		男性	女性	総数
対象者		23	12	35
有効回答者数		19	11	29
有効回答者 所属学科	健康科学科	7	3	10
	体育学科	10	7	17
	こども発達学科	1	1	2

表 2. 有効回答者の障がい者スポーツとの関わりと時期について

		小学生 (人)	中学生 (人)	高校生 (人)	大学生 (人)	合計 (人)
障がい者スポーツの関わり	あり	1	3	2	9	15
	なし					14

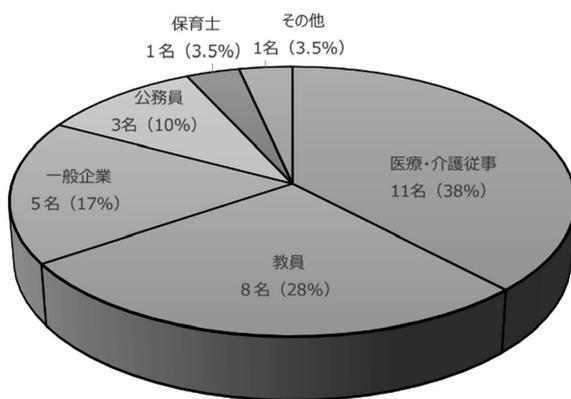


図 2. 対象者の希望する進路先

2. 障がい者スポーツに対する意識の変化について

障がい者スポーツに対する意識調査項目において、障がい者スポーツ実施前では「つまらない」、「競技

実施にて動きが無く、スポーツとして魅力がない」「障害者だけ実施するスポーツ」に対し否定的意識であったが実施後では否定的意識はより有意に増加した ($p<0.01$)。また、「リハビリテーションの一環として実施するもの」は肯定的意識を示したが実施後では肯定的意識は有意に減少した ($p<0.05$) (図 3)。

3. 障害者に対する意識の変化について

障害者に対する意識調査項目において、障がい者スポーツ実施前では「スポーツの実施は危険である」「かわいそうだ」に対し否定的意識を示したが、実施後では否定的意識は有意に減少した ($p<0.05$) (図 4)。

考察

障がい者スポーツに対する意識について実施後では、「つまらない」、「競技実施にて動きが無く、スポーツとして魅力がない」「障害者だけ実施するスポーツ」は否定的意識がより増加を示した。また「リハビリテーションの一環として実施するもの」は肯定的意識が有意に減少を示した。

横尾ら (2009) は、大学生がブラインドサッカーを通じて視覚障がい者との交流が障害者、障がい者スポーツの印象に与える変化について検討したところ「コミュニケーションの困難さを感じたが、積極的に図ることで交流を楽しむことができた」や「目が見えない分、五感を感じボールタッチの感覚や頭の中でのイメージを高められた」など使用不足部分を補うことを考えることが、障がい者スポーツに対する印象を変化させると報告している。また、小玉 (2017) は、障

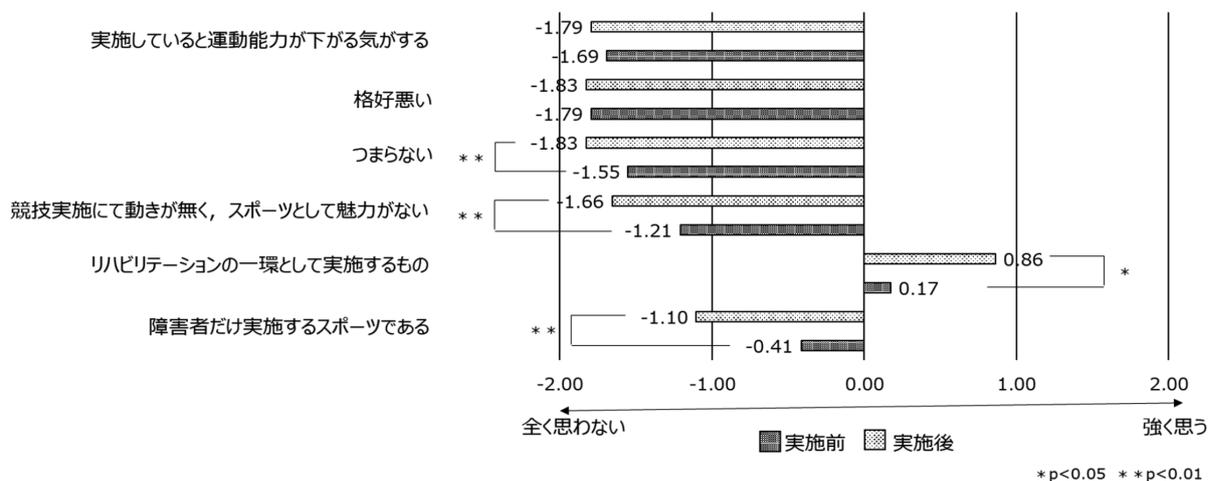


図 3. 障がい者スポーツに対する印象

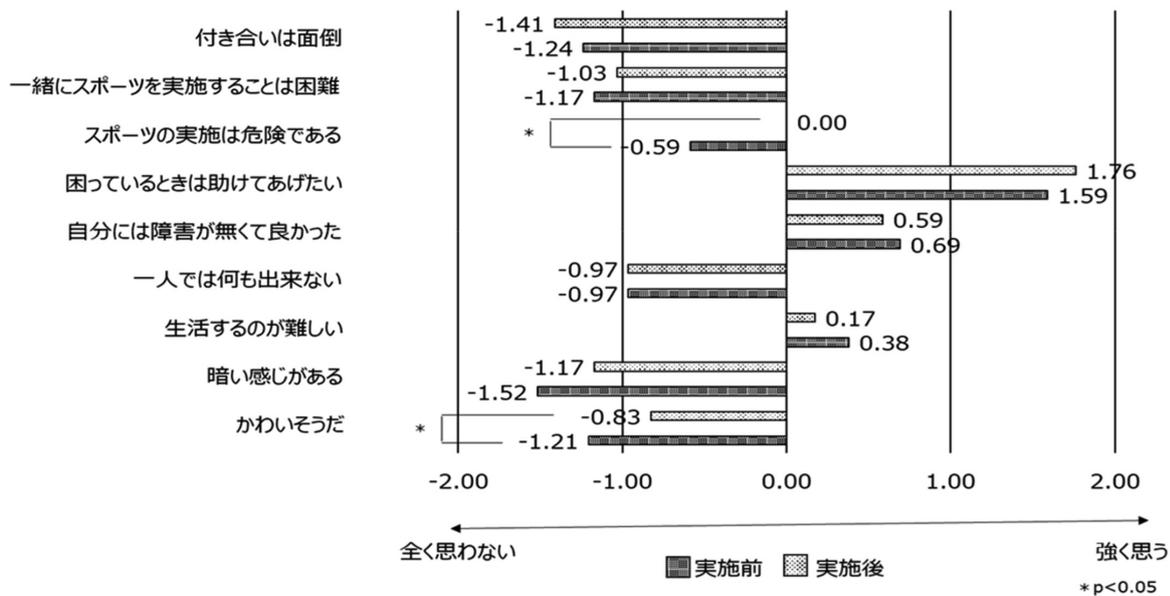


図4. 障害者に対する印象

がいが者スポーツの体験をすることは障がいが者スポーツへの興味、障がいが者スポーツに対する否定的な印象を肯定的な印象に変化させる傾向にあると報告している。

障がいが者スポーツの実践では不足する身体的機能に対し残存する機能をいかに活かし運動の実施に繋げるかを考える思考過程が含まれると報告されている（日本障がいが者スポーツ協会，2016）。

本研究では、今回は視覚を閉鎖した状態でのスポーツ実践を行なったが、各実施動作に対し見えない状況下で、どの様にして指定した動作が実施出来るかまたは、指示を与え実施させるかと言った思考過程が含まれていたため実施後では「つまらない」、「競技実施にて動きが無く、スポーツとして魅力がない」「障害者だけ実施するスポーツ」の質問項目に対し否定的意識がより否定的になり、「リハビリテーションの一環のスポーツ」に対する肯定的意識が有意に減少を示したと考えられた。

障害者に対する意識について実施後では「スポーツの実施は危険である」「かわいそうだ」の質問項目に対し否定的意識は有意に減少を示した。

内田ら（2013）は、障害疑似体験に比べ障がいが者スポーツの実施の方が障害者支援に関する肯定的な応答が高かったと報告している。また、久野（2001）は障害疑似体験では複雑な障害を正確に体験することは出来ず、逆に障害者は何も出来ない存在であると否定的な見解が強調されたと報告している。

本研究では、障害者に対する否定的な質問項目に対

し実施後では肯定的意識に変化を示した。これは、障害疑似状態下においてスポーツ動作を実施することにより、各種動作の実施困難さや恐怖感を身に感じたことで障害の理解が浸透したと考えられた。しかし、スポーツとしての運動内容や強度、実施種目も少なかった点もあることから、先行研究にある障害疑似体験に類似した結果につながったと考えられた。

川田ら（1999）は大学体育の授業に障がいが者スポーツの一つであるシッティングバレーを通年で実施し、各学科での障がいが者スポーツに対する意識や捉え方について比較検討したところ、障害者と関係性のある学科と関係性の無い学科では意識の変化に大きな差を生じたが、障がいが者スポーツを身近に感じられ体育の授業等で提供していくことも効果的であると報告している。吉岡ら（2007）は、体育学部の学生を対象に障害のある人と実際に障がいが者スポーツを実施することで認識の変化について検討し、体験や学習が学生の障害（者）、障がいが者スポーツに対し認識を変化させる効果はあるが「現場で実際に関わる」といった次の行動にまで影響を与えることは難しいと報告している。

以上のことから、障がいが者スポーツの実践は障がいが者スポーツや障害者に対する意識を変化させる効果があることが示唆された。しかし、障がいが者スポーツの実践内容が障がいが者スポーツや障害者に対する意識変化に与える影響も考えられるため、より障害者、障がいが者スポーツの理解、浸透を深めるためには実施目的や種目の選定、運動強度等についての検討も必要であると考えられた。

結語

医療従事者を目指す学生のみならず、他の希望職種を目指す学生においても、障がい者スポーツを実践することで障がい者スポーツや障害者に対する意識の変化が認められた。2016年4月1日に施行された障害者差別解消法により、今後社会に輩出される学生は、今まで以上に就職先で障害者と触れ合う機会が多くなる。よって、障害の理解や適切な対応方法を事前に学ぶためにも教育研究機関において障がい者スポーツの実践学習を学ぶことは今後必須になると考えられる。その為にも今後教育研究機関は、障がい者スポーツが実践できる環境作りを行なう必要がある。

本研究は2017年度環太平洋大学学内特別研究費によって実施された。

謝辞

本研究に御協力を頂きました学生ならびに先生方に心より感謝申し上げます。

尚、本論文では法令に準拠し一般的に障害および障害者を指す場合は障害、障害者と記載し、障がい者スポーツの記載においては体育・スポーツ分野で一般的となっている障がい者スポーツとして記載した。

参考文献

- 久野研二：障害と態度 尺度と啓発－最近の傾向－。リハビリテーション研究, 109, pp32-36, 2001。
(公財)日本障がい者スポーツ協会 編：(公財)日本障がい者スポーツ教本 初級・中級。ぎょうせい, pp11-12, 2016。
川田公仁, 山本哲也：大学体育の授業における障害者スポーツの試み－シッティングバレーボールを用いて－。つくば国際大学研究紀要, 5, pp111-122, 1999。
小玉京士朗, 早田 剛, 河合洋二郎, 相澤 徹, 村重 良一：障がい者スポーツボランティアに対する意識調査。環太平洋大学紀要, 10, pp233-238, 2016。
小玉京士朗：障がい者スポーツボランティア活動における学生の意識変化。環太平洋大学平成27年度学内特別研究費研究成果報告書, pp71-79, 2016。
小玉京士朗：障がい者スポーツによる学生の意識変化。平成28年度環太平洋大学学内特別研究費報告書, pp63-68, 2017。
松尾哲矢, 依田珠江, 河西正博, 和 秀俊：車椅子運動が子どもにもたらす生理的・社会心理的効果に

関する研究。笹川スポーツ研究, 2 (1), pp222-229, 2013。

大山祐太：大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果。北海道教育大学紀要, 67 (2), pp267-276, 2017

永浜明子, 藤村弘子：アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告 (第I報)。大阪教育大学紀要, 60 (1), pp39-40, 2011。

永浜明子：アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告 (第II報)。大阪教育大学紀要, 60 (2), pp31-44, 2012。

内田若希, 大谷まや：障害者スポーツ実習と障害疑似体験における障害理解の差異の検討。障害者スポーツ科学, 11 (1), pp33-41, 2013。

横尾智治, 八宮孝夫, 牧下英世, 鈴江智彦, 岩崎彰治, 浅井 武：ブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流。筑波大学附属駒場論集, 49, pp175-180, 2009。

吉岡尚美, 内田匡輔：障害のある人と「障害者スポーツ」に対する体育学部生の認識の変化に関する調査－「障害者スポーツ演習」の試みと効果－。東海大学紀要, 37, pp21-27, 2007。